立教英国学院通信

第二百五十八号　二〇一一年七月十五日
発行者　立教英国学院
RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GUILDFORD ROAD, RUDGWICK　RH12 3BE
http://www.rikkyo.co.uk

第５回

チャプレンより

高野主教は立教英国学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の時間には、大変豊かな知識を感じさせる、様々なお話をして下さいます。

ウエストミンスター寺院
東日本大震災追悼式
高　野　晃　一

平成二十三年六月五日(日)午後六時三十分～八時、ロンドンのウエストミンスター寺院に約二千人の人々が集まり「東日本大震災追悼式」が行われました。こちらでは四月以来ほとんど雨が降らず、草原も茶色に変わり野菜や果物、麦やトウモロコシなどの生育にも心配がなされていましたが、なぜかこの日は大雨の日でした。礼拝堂内は半数が英国人や各国の人々、半数が日本人の人々で満席、まさに会衆席は埋め尽くされました。当然の事ですが、つい先日行われたウイリアム王子とケイトさんの「ロイヤル・ウエディング」の司式者団のうち、カンタベリー大主教を除いた、ほとんど同じ寺院のキャノンたちが司式して行われました。これに私も司式者の一人として招かれ加わりました。会場に備えられた礼拝式文のパンフレットの表紙には、墨で記された「絆」の文字がありました。礼拝堂の中は充実した緊張の雰囲気が感じ取れました。

一九九五年阪神淡路大震災が起こり、大阪川口の主教座聖堂も塔が壊され礼拝堂も傾きました。私はその礼拝堂の床から鉄の棒を拾い、それで主教の十字架と指輪を作り身に着けて復興を誓いました。この礼拝にもその十字架と指輪を着けて司式に加われたのは、日本では縁と云うのでしょうか。

聖歌と共に十字架を先頭にしたプロセッションで式は始まりました。開会のお祈りに続き現在ロンドン大学の大沼教授が震災、津波、原発、避難などの経過と現状について報告されました。ここで朗読された旧約聖書の日課「エレミヤ書四章二三―二六節、三一章一―六節」には、震災と全く同じ様子が記されているようで驚きを覚えました。続いて英国赤十字社の代表がその活動について話され、今までに義援金十四億円が集まり現在も続けられています。今回の礼拝の前後にも募金が行われ義援金に加えられます。

続いて追悼の式として、約三十名の日本人の子供が手に灯したロウソクを持って並び行列、司式のキャノンと在英日本大使が花束を供えました。それと同時に日本山妙法寺の僧侶数名による「南無妙法蓮華経」の朗々たる読経、また数人による大太鼓の奉納の音が礼拝堂内に大きく勇壮に響き渡りました。さらに岩手花巻の宮沢賢治さんの「雨ニモマケズ」の朗読が続きました。私が中学三年生のとき花巻に賢治さんの両親と弟さんを訪ね、仏壇の前でこの詩が記されている手帳を自分の手に取って読んだことがあるので、これもまた胸に深く響くものがありました。この詩の心こそ復興を願う私たちの願いそのものでしょう。

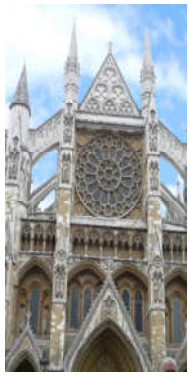
ロンドン橋の南サザーク大聖堂の大執事の説教は、松尾芭蕉の「奥の細道」から、立派な日本語で俳句を引用し朗読した深くもまた素晴らしいものでした。礼拝後に私が「私も芭蕉が好きで何度も跡を訪ねましたが、今回は本当に驚きました。」と話すと、彼は「芭蕉は大きくて深く大好きです。東京の隅田川近くの芭蕉庵にも行きました。」などと話していました。

日本人女性合唱団のスコットランド民謡「埴生の宿」の英語と日本語の合唱の後、私と他の日本人二人で日本語と英語で、亡くなった方やその家族のため、避難している多くの方々のため、放射能汚染に苦しむ人々のため、また政治や地域の指導者、復興に向けて努力している様々な分野の人々のため、こうした人々に主の恵み励まし希望が与えられるようお祈りしました。最後は主の祈りと祝祷です。

再び十字架を先頭にプロセッションで退場の後、司式者団は出入口に立ち挨拶を受けました。私も何十人という人々から「今回の礼拝は本当に素晴らしかった。深く胸を打たれた。思わず目に涙が溢れた。イギリスや世界の人たちがこんなにも日本を応援してくれているのか良く分かって感動した。」などと次々に感謝の言葉を掛けられました。私も心から感謝の気持ちに満たされ、この礼拝を計画し実現に協力して頂いた英国聖公会とウエストミンスター寺院の沢山の人々に深く感謝し、「この礼拝を通しても分かるように、英国や世界の人びとが日本の人々のことをこんなにも心に留めお祈りし支援して下さっていることを必ず日本の教会や人々に伝えます。」と話しました。実際に今までもこちらで会う英国や各国の人々は会うと必ず声をかけて下さいます。

翌日の朝学校に来たら、立教の先生から「ＪＳＴＶ（日本衛星放送テレビ）のニュースで、昨夜の礼拝の様子を放送していて、高野先生の姿もきちんと映っていましたよ！」と言われました。ここに海外でも多くの人びとが日本の復興を心から願い祈っているということをお伝えしたいと思います。

これらの様子はここ立教英国学院の生徒たちにも伝え、礼拝式文の表紙に記されていた「絆」の文字の意味と、イエス様が教える「共に生き愛することの大切さ」を話し学びたいと考えております。



生徒会が集めた被災地へのメッセージを花びらに

―目次―

	ページ
第５回　チャプレンより	1
JAPANESE EVENING	2
地元の町でチャリティー活動	2
卒業生による被災地での活動	3
新学期を迎えて	4
球技大会	5
ミニ アウティング	5
ホームステイ	6
校外学習	7
立教歳時記	8

＊コラム＊

	ページ
イギリスの方々からのメッセージ	2
本校の生徒・教員が参加した震災後の行事・活動	3
校長式辞	4
ROYAL WEDDING	5
TOEIC 始まる	6
地元の町“CRANLEIGH”	7
ケンブリッジ大学サイエンスワークショップ 2011	8

JAPANESE EVENING

毎年一学期に行われるジャパニーズ・イブニングとは、近隣のイギリスの方々を招き、日本の文化を紹介し、また体験していただきながら交流を深めようというものです。剣道、茶道、書道などのセクションに分かれて、学期の初めから当日までプレゼンテーションや実演、説明の練習を重ねます。今年のジャパニーズ・イブニングは生徒会からの提案により例年とは少し違ったものになりました。

「遠く離れている自分たちでも、できることをしたい」

日本で起きた大震災。イギリスにいる自分たちだからこそ何か出来ることはないか？日本で起きた震災の様子を伝え、その上で心配や援助をしてくれたイギリスの人達に改めて感謝の気持ちを示そうと思い立ちました。生徒たちが一生懸命に作ったのは「メッセージの木」。当日来場した方々に、桜の花びらの形をした紙に日本へのメッセージを書いてもらい、大きな木の絵に貼っていくというもの。当日は七十名近いお客様が来校し、見事に桜の木を咲かせることが出来ました。また、英国から日本に救援に向かって下さった消防隊の方をお招きし、現地での活動の様子を聞いたり、また直接支援活動への感謝を伝えることができました。

当日寄せられた震災への基金約五五〇ポンドは、英国赤十字社を通して寄付されました。

JAPANESE EVENING 折り紙企画

イギリスの方々からのメッセージ

3月11日に起こった東日本大震災。地元の様々な方々から温かい励ましのメッセージが、毎日のように学校に届けられました。テレビや新聞で報道される日本の様子に非常に驚きながらも、日本の人々の強さと冷静さに心打たれたイギリスの方々からのメッセージ。その一部をご紹介させて頂きます。

◆We are all thinking of you and your colleagues and pupils at Rikkyo School during this tragic time in Japan. Our sympathies go out to you and your families. You are in our thoughts and prayers. （交流のあるハーストモンシュー小学校の先生より）

◆My wife and I will pray especially for you and your families in Japan, that you will all overcome this and become a stronger nation, our Christian love to all at Rikkyo.
（地元クランレーに住む方より）

◆When I look at the TV pictures of the devastation and then see, in spite of the shock and loss, a sense of determination on the face of the people I am strangely moved by the character and dignity shown and have a sense that Japan will recover.
The solidarity I referred to above will remain a permanent memorial to what has occurred.（生徒たちがお世話になっているヘルスセンターのドクターより）

地元の町でチャリティー活動

四月九日（土）、地元ホーシャムの町で、東日本大震災のチャリティーイベントが行われました。英国ではロンドンのほか各地で、在住する日本人達が立ち上がり、震災直後から義援金が集められています。

今回のホーシャムでのチャリティーイベントは、英国赤十字社の支援のもと、大震災や津波の被害の大きさを訴えて募金を呼びかけるだけではなく、日本文化を体験できるワークショップを通じて義援金を集める工夫もなされました。ヨーヨー釣り、独楽や剣玉遊び、お箸ゲーム、日本語入りのしおり作り、折り紙、浴衣体験といったコーナーや剣道・茶道のデモンストレーションが行われ、二十名以上の日本の人々がスタッフとして協力し、本校教員数名も各コーナーで活動しました。両親に甘えてコインを貰って何度も挑戦する子供や、なかなか浴衣を脱ぎたがらない子供もあったほど、イギリス人の子供たちも夢中になってくれました。

また、被災地で活動された地元地区の五名の消防隊員をお招きし、被災地で実際に見てきたこと・体験してきたことを丁寧にお話しして下さいました。

英国の多くの方々の協力を得てこのチャリティーイベントは行われました。集まった義援金は英国赤十字社を通して日本に届けられます。英国の皆さんに心から感謝を申し上げたいと思います。

剣道のデモンストレーション

【１学期の行事】

4 月 17 日	入学始業礼拝	6 月 12 日	英語検定１次試験
4 月 18 日	健康診断、高等部実力テスト		第 63 回漢字書き取りコンクール
4 月 19 日	ブルーベル見学	6 月 15 日,18 日	ケンブリッジ大学英語資格試験
4 月 29 日	ROYAL WEDDING		Preliminary English Test、
5 月 2 日	球技大会		Key English Test を受験
5 月 3 日	午後ブレイク	6 月 17 日	小中学部はライムレジスへ外出
5 月 3～14 日	ライゲイト＆レッドヒル音楽祭		高等部 1・2 年生はロンドンへ外出
5 月 8 日	生徒会主催ギルフォードショッピング	6 月 19 日	ギターコンサート
5 月 13 日	JAPANESE EVENING	6 月 24 日	ウィンブルドン・テニス観戦
5 月 15 日	スポーツテスト	6 月 29～7 月 4 日	期末考査
5 月 23～6 月 10 日	高等部 2 年生 I.G.C.S.E.試験	7 月 7 日	チャリティー・スクールコンサート
5 月 28～6 月 5 日	ハーフターム	7 月 9 日	終業礼拝、生徒帰宅
6 月 8 日	茶道部、ミセス・ギンバーのご友人へお茶会	7 月 10 日	英語検定２次試験
6 月 11 日,14 日	ケンブリッジ大学英語資格試験	7 月 10～16 日	ウォルバーハンプトン校短期留学
	First Certificate in English を受験		夏期ホームステイ、高３夏期補習

卒業生による被災地での活動

渡瀬剛人さん

三月末の大震災・津波被害の復旧作業の様子が盛んに伝えられる頃、アメリカ、オレゴン州の新聞に被災地で活躍している十八期卒業生の渡瀬さんの様子が伝えられました。本校でも被災者のための募金活動や被災地域の学校をケンブリッジサイエンスワークショップへお招きする等の活動を行っていますが、実際に現地で活躍する卒業生の姿に胸を打たれます。

渡瀬さんは中二から高三まで在学し、特に近隣の学校で開催された大会のコースレコードを、得意のバタフライで次から次へと更新する姿が印象的でした。本校卒業後は名古屋大学医学部を経て、現在はアメリカオレゴン州救急病院で活躍しています。

未来への切符―被災地での二週間

十八期生　渡瀬　剛人

二〇一一年三月十一日。テレビの津波映像から目を離せなかった。オレゴンにいた自分は、その現実を実感できないでいた。しかし何回もその映像を見せられるうちに、それが現実であることを無理矢理押し付けられた。すぐに被災地に飛び立ちたいという衝動と仕事と家族に対する責任の狭間で、心は揺れ動いていた。二週間後、自分は被災地、本吉（気仙沼市近郊）にいた。

被災地に向かう車の中からみる景観には驚かされた。大地震が起こったはずなのに、何事もなかったかのように建物は整然と立っており、道路は滑らかで、畑には農作物が植わっている。しかし、ある点を過ぎたら全てが変わった。建物はおろか秩序そのものがなくなっている。代わりに、ゴミの山と混沌が辺りを支配していた。

着いたのは本吉市にある市民病院。三十床ほどの小さな二階建ての病院。倒壊は免れたが、津波時には一階は水没。一階にあったCT、検査機器、カルテ、エレベーターなど全てが使い物にならない。電気のスイッチを入れても、スイッチの音だけが悲しく響く。水道の蛇口をひねっても、出てくるのは水数滴のみ。寝食と診察をする二階に荷物をおろし、自給自足の生活が始まるのだと自分に言い聞かせ、寝心地の悪い床で仮眠をとる。

患者さんは、避難所や自宅などから来院する。一日に二百人以上の患者さんが様々な訴えをかかえて来院する。単なる風邪や関節痛から、命に関わる呼吸器疾患、心臓発作、脳梗塞と色々だ。まず大変だったのは、エレベーターが壊れて使えないので、自力で二階に上がれない患者さんは、担ぎ上げないといけない。また、まともな検査もできないため、医療の原点である問診と診察が大切となる。薬も例に漏れず不足しているために、数日分しか処方できない。こういった状況では最高の医療を求めていてはダメだ。最善の医療を求めようと心に決めた。

東北の人たちは気丈だ。患者さんの中には家を流された人、家族を亡くした人が多くいる。しかし、皆、決して取り乱すこともなく、礼儀正しい。また、それぞれの訴えが氷山の一角であることも知る。ある中年女性が「肩が痛い」という訴えで来院した。肩の痛みに対して痛み止めを処方して帰そうとし、何気なくどうしたのかと聞いたところ、聞き入らずにいられなかった。その女性は津波に流され必死で家の屋根にしがみついていたところ、流れてきたタンスがぶつかってきて肩を痛めたとのこと。その衝撃でまた更に津波にのまれ、どうして自分が助かったのか分からないと小声で言っていた。被災地では、単なる「肩の痛み」が、とてつもない重さをもつのだ。

被災地での活動が終盤に差し掛かってきた頃に、ふと疑問がわいてきた。自分は多くの患者さんを診てきたが、果たしてどれほど役に立ったのか分からなかったのだ。自己満足に浸っているだけかもしれないという不安がよぎった。そんな時に出会った、ある患者さんのことが忘れられない。この患者さんは初老の女性であり、コレステロールの薬を処方してもらうために来院していた。

女性：（薬を胸に抱きしめ）先生、本当にありがとうございます。これで助かりました。ホッとしました。

自分：薬ぐらいでそんなに感謝しないでください。こっちが恐縮するじゃないですか。

女性：（しばらくの沈黙の後に）私は、赤子の孫以外の家族全員を津波に奪われました。孫にとって唯一の肉親が私です。孫が成人するまでは私は頑張らなきゃならんのです。病気にはなれんのです。この薬は他の人にとっては単なる薬かもしれんけど、私にとってはかけがえのないものなのです。この薬は私にとって未来への切符みたいなものです（そう言って彼女は大切そうにその薬をしまい、お辞儀をしながら部屋を出ていった）。

被災地で医者として何ができたか？正直、大きなことは何もできなかった。しかし、薬を処方すること、手を握ること、話を聞くことは何十回、何百回としてきた。そういった行為が、患者さんにとって未来への切符ともなればいいかと、少しだけ安堵の表情を浮かべながら自分は被災地をあとにした。

本校の生徒・教員が参加した震災後の行事・活動

3月26日(土)	クランレーの町で募金活動
4月9日(土)	ホーシャムの町でチャリティー活動
5月13日(金)	本校にて Japanese Evening
6月5日(日)	ウェストミンスター寺院で Memorial Service （本校のチャプレンが司式者の一人として参加）
7月7日(木)	本校にてチャリティー・スクールコンサート

新学期を迎えて

天候に恵まれた四月十七日（日）、多くの保護者の方にもご参列いただき二〇一一年度入学始業礼拝式が本校チャペルにて執り行われました。三十五名の新入生を迎え、全校生徒一一六名での新学年スタートです。新入生にとって初めての寮生活であり、起床時のベッドメイクから就寝まで、全てを自分でしなければなりません。そんな時に常に助けてくれるのは、同室の同級生や食事の席の隣り合った先輩です。新学期を迎えた立教は、新鮮で新しい活気に包まれています。

初めての立教英国学院

中一　楢岡　詩英梨

私は十七日に立教英国学院に入学しました。ここの学校は二〇一一年から日本在住の人でも入学可能になりました。私はそのことを両親に聞いてからずっと行きたいと思っていました。そして私は今、あこがれの学校に入学しました。緑が多く自然の中にある、とてもいい学校です。全寮制なので最初は寮の人と仲良くなれるか心配でした。しかし、同じドミトリーの人はみんな優しくて同じ学年の人が多かったので今はもうみんな友達です。

学校での毎日はとても楽しく、先生も優しい方達ばかりでとてもうれしいです。でも、朝の早起きだけは少しつらいです。それでもこの英国学院での生活は本当に楽しいです。

話は変わりますが、この学校に来る少し前にテニスにはまりました。まだまだ初心者でできないのですが、これからたくさんやってうまくなりたいと思っています。でも、勉強もしっかりがんばりたいです。中学生になって英語が難しくなり、算数が数学になるので一段と大変になると思っていますが、両立していろいろなことにチャレンジしたいと思います。

今はあこがれていた学校で勉強して生活できることがとても幸せです。本当にこの立教英国学院に来てよかったです。

中１　ウィンブルドンにて

立教英国学院に入学して

中三　川崎　真実

私が立教英国学院に入学した一番の理由は、勉強をする環境が整っていたことです。私の家は、質問しても誰も解らないと言って答えてくれないことが多いのですが、その点、立教英国学院ではいつでも先生に質問できるのが魅力的でした。その他にも、緑が多いことや、共学や寮での生活など、今までの生活とは違った体験ができる事などといった理由がありました。

そんな未体験の生活に不安と期待を抱きながら入学した立教英国学院は、想像より遥かに良い学校でした。

ただ一つ違ったのは、一番魅力に感じていた勉強をしやすい環境より、もっと魅力的だったのが、立教生の『優しさ』だったことです。何もわからず入学した私に、同学年の子はもちろん、先輩方や私より前からいた下級生の子たちも、色々な場面で私に立教英国学院のルールを教えてくれました。

立教英国学院は、普通の学校とは違い、寮の自分の部屋から出る時はパジャマの上に必ずガウンを着る、食事中に遠くにあるものをとりたい時は、伝言ゲームのようにして人に取ってもらってまわしてもらうなど、他の学校にはないルールが多く、なかなか慣れませんが、みんなが教えてくれるので頑張って早く覚えたいです。

私のこれからの目標は、オリエンテーションで校長先生もおっしゃっていたように、『正の連鎖』が続くよう、今度は私が新入生の見本になれるような、優しくて人に頼られるような人になれるように、Reading Marathon 等といった自主参加型のものにも積極的に参加して、多くのことを学び、きちんと自分のものにしていきたいと思います。

EC の先生とスペシャル・ディナー

校長式辞

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。そして在校生の皆さん、進学おめでとう。

はじめに先月の大震災で被害にあわれた方々に心からお見舞いを申し上げたいと思います。あわせて、ここでイギリスの人々から寄せられたあたたかい励ましについて、皆様にお伝えしたいと思います。この１ヶ月の間に、数え切れない方々から沢山のお見舞いと励ましの言葉やお手紙をいただきました。学校に荷物を届けにきた宅配便のおにいさんが、車からもどってきて「これ募金に入れてください。」と言って１０ポンド札を差し出したのには本当に感動しました。いかにイギリスの人たちが日本と日本人を応援してくれているか、いかにこの学校が日本とイギリスを結ぶ架け橋としての使命を負っているか、感動と共にそれらのことに深く想いを抱いた１ヶ月でもありました。さて、ここで生徒の皆さんにお願いがあります。前からいる生徒諸君は、先学期の生徒会の選挙のときに、去年の生徒会から各立候補者に対して、「立教の良いところは何だと思いますか？」という質問があったのを覚えていると思います。あのとき、立候補者全員が答えていたのが、上級生が優しい、ということです。上級生が優しい、ということは、実は学校にとって簡単なことではありません。とてもすごいことなのです。あるとき突然急に上級生が優しくなる、ということはありえません。よく耳にする話は、先輩からいじめられる、だからその時はずっと我慢して、自分が上級生になったら今度は下級生に同じことをやり返す、これはまさに負のスパイラルです。

一度こうなってしまうと、その負の連鎖を断ち切る、というのはとても難しくなります。今の立教はまさにその正反対、正の連鎖が続いている状態です。

あのとき先輩から優しくしてもらった、あの上級生が面倒を見てくれた、だから自分が上級生になったら今度は自分が下級生に優しくしてあげよう、後輩の面倒をよくみてあげよう、この状態、正の連鎖を断ち切らないで守り続けていってください。一度切れた鎖を元にもどすのはとても大変です。これは上級生だけのことではありません。気をつけなければいけないのは下級生の方でもあります。先輩が優しいからといってそれに甘えすぎないように。ちゃんと礼儀を守る、けじめをつける、言葉遣いに気をつける、そういうところをきちんとできなければいけません。それができたときに初めて、優しい上級生という存在が成り立っていくのです。このことを忘れないでください。

立教生一人一人が、学校をよくしていくためには何をしたらいいか、友達のために何をしてあげられるか、先輩のため、後輩のため、一緒に生活している人のために何ができるのか、いつもそういうことを考えながら、これからの生活を送っていってほしいと思います。

球技大会

例年よりも遅めのイースター、更にロイヤルウエディングが続いて大型連休となった最終日、五月二日に球技大会が開催されました。前日の夜、黄色と緑の両チームのメンバーには、高三が作成したチーム色の鉢巻、Tシャツなどが手渡され、否応なしに大会に向けて士気が高まっていました。

当日は絶好の大会日和となり、バスケットボール、バレーボール、ポートボール、ソフトボール、サッカーと各所で熱戦が繰り広げられ、今年は緑チームが大勝利。勝利した緑も惜しくも敗れた黄色も互いの健闘を称え合いました。

球技大会

中二　松田　祐理子

悔しい。勝ちたかった。黄・緑で優勝を争った球技大会。初めての球技大会はあっという間に過ぎていった。でも、そのあっという間の中にある先輩の温かさ、優しさを私は一生忘れないと思う。

立教英国学院に入学してすぐ球技大会の練習が始まった。私の球技はソフトボール、色は黄色だ。毎日ある練習。気付くともう球技大会当日になっていた。

今まで一生懸命ソフトボールを教えてくれた高三の先輩にとって最後の球技大会である。勝たなきゃ。ミスなんて絶対出来ない。それは分かっていた。試合が始まって私はパニックになった。ミスしちゃいけない。そればかりが頭をまわっていた。気持ちばかりが前に出て、結局ミスをしてしまう。自分のせいで試合に負ける。そう言う思いが頭を過った。いやだ。そう思うと涙が出てきて止められなくなった。

先輩が私に言った。「まだ試合は続いているんだよ。泣いちゃ駄目。」

そうだ。まだ負けていない。勝つチャンスはいくらでもある。何でこんなに自分が思いつめているのかが分からなくなった。ミスをしても、自分で取り返せばいいんだ。そう思えた。

その後、守備はミスをしてしまったが、その分攻撃する時に開き直ってプレー出来た。そして勝った。うれしかった。というより、信じられなかった。そして気持ち良かった。自分がやっとソフトボールの黄色のメンバーの一員になれた気がした。

守備の調子が良くなかったので、午後の試合に私は出なかった。少し残念だけれど、私は先輩が言ってくれた言葉の重さ、真剣さ、そして優しさを噛み締めていた。

黄色のソフトボールは二試合とも勝った。しかし総合結果では緑に負けてしまった。一度でも勝てないと思った自分がその結果に表れているようで、私はとても悔しかった。自分に負けた気がした。でもそれに気付かせてくれた先輩の言葉がずっと心に残っていた。

「まだ試合は続いているんだよ。」

この言葉はどんな事にも共通して言えることだと思う。途中であきらめたらそこで終わりなのだ。続きは無い。どんな目にあってもあきらめてはいけないのだ。そう思う。

これから自分の未来はどうなるかなんて分からない。でも自分がやりたいことをあきらめずに深めていくことでつかめる未来があると思う。

球技大会でのバスケットボールの試合

ミニ アウティング

今年から始まった一学期のアウティング。高二は漱石記念館に向かいました。このため、毎日のホームルームでは漱石の『自転車日記』を、朗読当番の生徒と共に全員で少しずつ読んでいました。案内して下さったのは、記念館を創設された恒松氏のご夫人です。

漱石がなぜイギリス留学することになったのか、彼がなぜ二年の留学生活で五回も下宿をかわったのか、どんな思いで毎日を送ったのか、なぜ帰国したのか。漱石の気持や息づかいが感じられるような、面白いお話をうかがい、見学しました。

漱石は文部省の留学生だったけれども、十分な資金が提供されず、大学に入ることが不可能だったこと。そのために、本を買って独学し、また大学教授や知識人に附いて個人教授で学んだこと。安い下宿を求めて何度もかわることになったこと。社交が十分できるほど経済的余裕がなかったので、下宿の食事を摂る時間が英語を使う貴重な機会だったこと。漱石その人の苦悩や前を向いて歩む姿に、感銘を受ける思いでした。

単身赴任だった彼が、何度手紙を送っても妻から届く手紙は少なくて、寂しい思いもしていたそうです。彼が使ったに違いないビクトリア朝の郵便ポストを見て生徒がぽつり。

「なんて書いた手紙を投函したんだろうねえ。」

「奥さんに『もっと手紙頂戴』って書いたんじゃないかなあ。」

インターネットや電話がある今でも、両親のもとを遠く離れて寮生活を送る生徒にとって家族との対話は欠かせないものです。彼らの心に響いたのでしょう。

漱石の下宿前で

昼食をピカデリー・サーカス付近の繁華街でとると、午後はイングランド銀行の博物館へ。普段なかなか訪れない『ロンドンのシティー（ビジネス街）』の様子は、車窓から物珍しく目に映りました。イングランド銀行は、日本では日本銀行にあたるところ。ドルが基軸通貨となるよりも以前に、世界に大きな影響を与えた一六九四年設立の銀行です。入ってすぐの、インフレーションのバランス取りや、クイズを解き明かしつつ金庫開けなど、子供の心をぐっと掴む展示の数々に、立教生は大興奮でした。もちろん紙幣の歴史や、コイン刻印の機械、第一次世界大戦後の千ポンド札、金塊を持つ体験コーナーなど、学術性の高い展示にも目を奪われている様子でした。一番人気があったのは、様々な歴史的紙幣の展示室だったでしょうか。また、この日、高一はロンドンの大英博物館、小中学生はライムレジスを訪れました。

ROYAL WEDDING

4月29日（金）、英国中が楽しみにしていたロイヤル・ウェディングがウェストミンスター寺院にて行われました。立教でもオフの一日となり、食堂の大スクリーンで式の様子を鑑賞しました。エリザベス女王の孫である新郎のウィリアム王子と新婦のキャサリン・ミドルトン嬢の幸せそうな姿に立教生も大はしゃぎ。世紀の瞬間を見られて良かった、と喜びの声があがりました。

ホームステイ

ホームステイは、ハーフターム（5月末の中休み）と
1学期終了後に体験することができます。

イギリスの家庭を体験して

高一　藤木　紫苑

私が立教生として初めてホームステイをしたのは、イーストグリンステッドに住む家族のお家でした。そちらの母親というのは、二十年間日本で働いていらっしゃった方であり、また二人の娘さんがいたのですが、どちらも日本人とのハーフでありました。つまりイギリス、日本のどちらからの目線でも話せるという、とても恵まれた環境であったと思います。

義理の父親と兄を含め、七人で住んでいたので、毎日がとてもにぎやかでした。ホームステイの初日には、ブリティッシュワイルドライフセンターというところに連れて行ってもらい、たくさんのイギリスの野生動物を見たり、イギリスの歴史や環境問題を学んだりしました。小さな町ですが、イーストグリンステッドもとても歴史がある町で、第二次世界大戦中の負傷者のための施設としてできた病院が、今でもプラスティックサジェリーの専門病院として在るのは有名です。母親のエリザベスさんは、その病院で現在働かれているそうです。他にもたくさんの国で働いたり住んでいた経験のあるご家族だったので、いろんな視点からたくさんのことを話してくれました。娘さん二人とは日本の学校とイギリスの学校の違いや勉強の仕方の違い、カルチャーの違いなど一週間を通してずいぶんと話し合いました。

イギリスの家庭と日本の家庭を比べた時に、ライフスタイルの違いというのがまず大きいと思いますが、イギリスの方が家族で過ごす時間というのは長いように思います。それぞれの家族によって違ってくると思いますが、私が今までに知り合った欧米人の話を聞く限り、日本人の家庭はある程度の年になると、家族と過ごす時間はとても少なくなるけれど、欧米ではホリデーを必ず一緒に過ごしたり、両親の仕事も子どもの習い事などもきちんと夕方で終わるようなので、夜の時間を家族で過ごすことができるんだと思います。不思議なことに、イギリスと日本のティーンエイジャーを比べた時に、イギリスの若者の方が大人だとよく言われますが、イギリスの家庭も十八歳になるまで、つまり成人するまでは、きちんとした家庭教育がなされるのであり、それゆえの自立があるのだなと思います。欧米では、ファミリーを大切にすること、そしてその気持ちを表すことがごく自然にできることが良いなと私は感じていますが、日本の文化や精神を考えると、その良さも改めて感じることができ、やっぱりどっちが良いということはできないなと思います。

ホームステイ最後の日には、義理の兄のバンドのコンサートを見に、ブライトンへ行きました。本当に楽しい時間でした。このホストファミリーは偶然だけでなく出会うべくして出会ったように思えることがたくさんありました。エリザベスさんが言っていた「私が若い頃日本のホストファミリーにお世話になったから恩返しのつもり」という言葉を、いつか私も言えるようにしたいと思います。

人生初のホームステイ

高二　酒井　嵩史

僕が今回、ホームステイをしたところは、プルバラという南の方の小さな町でした。周りには何もありませんでしたが、典型的なイギリスのカントリーサイドで大自然を感じてきました。

初のホームステイだったので、多少緊張しましたが、ホストファミリーがとても優しく、親切な人達で感激しました。こちらから話しづらかった時に話しかけてきてもらったり、夕食後に話をする機会を設けてもらったり、休みの時ぐらい好きなものをと言って、食べたいものを作ってもらったりと至れり尽くせりでした。英語も僕達に話す時だけゆっくりと発音していて、とても聞き取りやすかったです。でも、英語で話すのは、難しかったです。日本語で考えたことを英語に変換することは大変でした。ボキャブラリーの無さと、文章を組み立てることの難しさに改めて気付かされました。これからは、グローバル化が進んでいっている時代なので、必然的に英語が重要になっていきます。円滑なコミュニケーションをとり、良い関係を築くことができるように、一層英語を学んでいきたいと思います。その成果を、見えて分かるものにするためにも、英語検定の試験やケンブリッジ英検などの試験も積極的に受けていこうと思っています。

夕食後に、パブリック・フットパス（イギリスの散歩道）を使って小1時間ほど散歩を一緒にしました。丘を登っていくと、牧草地や草木、花、羊などといったいろいろな動植物がいました。丘の上にあがると、そこはもう絶景でした。遠くの丘や海が小さく見えて、その真上には太陽があり、日が没するところをリアルタイムで見たという感じでした。

翌日には近くのタングミアという第二次世界大戦で使われた戦闘機が飾ってある博物館に行ったり、チチェスターという市のカテドラル（大聖堂）を見に行ったりと、充実した一週間でした。

今回は、充実してはいましたが、今ひとつ英語が思うように使えていなかったので、次回は更にしっかりコミュニケーションできるよう頑張ります。

TOEIC 始まる

本校では First Certificate in English を始めとするケンブリッジ大学主催の英語資格試験や、本校を会場に年に3回、実用英語技能検定も実施しています。そしてこの秋からは日本でも注目を集めている TOEIC を校内で実施することになりました。これに先立ち、校長自ら TOEIC を受験、見事に 990 点の満点をマークしました。

昨年度卒業生の中にも既に満点をとった生徒がおり、今後生徒たちにとって英語を学習する上での刺激剤となればと思います。

校外学習

英語

今年度から新たに始まった英語プロジェクトは中一・中二を四回に渡って近くの町に連れ出して、イギリス体験をしようという試み。

第一・二回はクランレーの町の「美しい風景」「お店」「家／建物」「公共施設／標識」の四つに焦点を絞って調査をし、町の様子をしっかり観察していきました。

三回目は、「町の人にどんどん話しかけてみる。」がテーマ。授業で習った疑問文をしっかり頭に叩き込み、話しかける時やお礼を言う時のセリフも練習して、いよいよ出発。行き交う人たち百人に現在住んでいる場所についてインタビューを開始しました。ビジネスマン風の男性に話しかけるとスタスタと歩き去られてしまいましたが、年配の方に話しかけると笑顔で丁寧に答えてくれたので、ちょっと勇気が出ました。集合時間になって待ち合わせの場所に戻ってきた生徒たちは、「何人も逃げられちゃった―。」「お年寄りの人は優しく聞いてくれる人が多いよ！」「立教の生徒？って聞かれた。みんな、学校のこと結構知っているんですね。」と大興奮。

最終回は、そのお店の種類や特徴を書いたワークシートに、「店名を書き込んでいく」というミッション。早速通りがかりの人を捉まえてお店の場所を聞いている積極的なグループもありました。様々な方に英語で話しかけることができ、皆それなりの収穫を得た満足げな顔でした。

文法やボキャブラリーも勿論大切ですが、本当に使える英語を学ぶには「手段としての英語」を目的をもって使っていくことが重要ではないか、そこから始まったこの「英語校外学習」。その成果はこれから彼らがどれだけ意欲をもって英語学習へ取り組んでいってくれるかにかかっていると言えそうです。

社会

社会的な取り組みとして、ホーシャムの街へフィールドワークに出掛けたのは、五月一九日（木）のことでした。『歩いて感覚をつかむこと』『街を観察すること』『自分で説明、表現できるようにすること』などを目的にしています。

四人ずつの少人数グループに分かれ、それぞれに先生が付き添い、まず街を歩き回ってみました。「スタート地点はここ。太陽の向きは？時間と影の伸びている方向を確認して。」周囲の建物も確認しながら現在位置を把握します。

「ここを右折してまっすぐ歩いて…ここがどこだか分かる？」―「最初のにぎやかな通り！つながった！」

「ヨシ、通りの名前も確認！」

「左折してまっすぐ歩いて、あの建物は何だ？」―「LIBRA…ああ、図書館だ。」

ざっと全体図を書いて、次は細かく確認しながら歩きます。目印になるもの、目立つお店、名前も確認して。カメラを持ってきた人は記録も撮ります。

「あのお店なんだろう？あそこの人に聞いてみよう。」と地元の人のところへ駆け出してゆく生徒もありました。生徒それぞれの観察力も光ります。自分の足で歩いて「つながった！」「わかった！」という発見と感動は何ものにもかえがたいものです。

学校に戻ってきてから新しい白紙が配られ、地図記号やイラスト、色付けなど、それぞれの独創性を生かしてオリジナル・マップを完成させました。

理科

ジュラシックコーストと呼ばれる海岸の町、ライムレジスは中生代の地層の見られる化石の町です。二億年以上前に繁栄したアンモナイトの化石がこの町の海岸ではいつでも見ることができます。六月十七日（金）、小・中学生はライムレジスに化石採集に出掛けました。

長いドライブの後、カモメが沢山舞っている海辺の広場で昼食を摂り、いよいよ化石採集ツアーの始まり。大きなリュックを背負って長靴を履いたガイドさん達が登場しました。地質学者のパディーさんと動物学者のクリスさん。どちらも「本当に化石が好き」という気持が熱く伝わってきます。

浜辺まで歩いていき、海藻やぬかるんだ砂地を注意深く進んでいくと、先頭のガイドさんの周りに生徒たちが集合し、どうやら最初の化石が見つかった様子。その頃から生徒たちはそこここでしゃがみこんで石をころころとひっくり返し始め、「あっ！見つけた！」「アンモナイト！」とあちこちで歓声があがりました。ひっくり返した石の裏に教科書の写真で見た通りのアンモナイトの模様が本当についている！大感動でした。

雨脚が少し強まってきた頃、ガイドさんが生徒たちを呼び集めました。「こういう薄めの石は割ってみると中に化石が入っていることが多いんだ。六つに一つくらいの確率でね。」そう言って採取用のハンマーで早速コンコンコン…。その石がパカッと上手く割れると、断面にきれいなアンモナイトの化石がいくつも並んでいました。写真を撮りながら、ガイドさんの華麗なハンマーさばきをしばし観察。採集した石をバッグや袋に入れて生徒たちは皆大満足で学校に戻りました。

アンモナイトの化石を持って

地元の町“CRANLEIGH”

学校から一番近い町、クランレー。車で約 15 分のところにあり、教員の多くがこの町に住んでいます。大手スーパーを始め銀行、スポーツセンター、図書館など町としての機能をしっかりと備えているにも関わらず、地元の人たちは「イギリスで一番大きな村」と誇らしげに語ります。生徒たちにとっては、クラス毎に日曜礼拝に参加する教会がある町、学校担当医の診療所がある町、毎週土曜日の午後、希望すればいつでも気分転換に外出できる町でもあります。最近では中学生が英語の校外学習で定期的にこの町を訪れるようにもなりました。

チェーン店が進出し現代化が進みつつも、“村の象徴”である由緒ある古時計、ローカルショップや戦没者のモニュメント、中央広場にある古い水飲み場の建造物など、この町らしさを演出するものも点在します。ハイストリートから少し横道にそれると、イギリスの田舎らしいゆったりとした家並みや風景が広がる美しい町です。

立教歳時記

職員室入口の花壇の茂みの中で入学式の頃から雉の母鳥がずっと卵を温めていました。同じ時期に中庭の花壇ではマガモの母鳥が卵を温めていて、こちらはあっという間に雛が孵りましたが、雉の方は一ヶ月近く何の変化も起きず、いつも悲しそうな目をして母鳥がじっとこちらを見つめているようでした。

いつも同じ姿でそこにじっとしている母鳥が時々いなくなる時があります。そっと近寄って数えてみたら二十個近くの卵がありました。マガモの雛が孵って母鳥とキャンパスを行進していく愛らしい光景はほぼ毎年恒例となっていますが、雉が卵を抱く姿はあまり見られません。しかも生徒や職員が頻繁に行き来する職員室の入口とあっては、可哀想に、場所の選択を誤ったかな、と同情の気持ちでその母鳥の悲しそうな目を見ていました。

ある朝、数学の先生が笑顔でやって来て「うまれましたよ！」と教えてくれました。慌てて花壇のところに行くと、母鳥がいつものように花壇の茂みの中にうずくまってこちらを見ています。気のせいかいつものあの悲しい表情とは違って見えました。姿の見えない雛達の小さな鳴き声が聞こえていたからでしょう。目を凝らして見ると茂みのあちこちに数羽の雛が確認出来ました。さらにしばらく待っていると、なんと母親のお腹の下から可愛い雛がひょっこりと頭を出しました。まるでカンガルーのお腹の袋のように、一羽二羽と雛達が忙しそうに出入りを始めました。その間も母鳥はじっとこちらを見て、大きな体を更に膨らませて威嚇しているようにも見えました。

茂みの中にじっとうずくまる母親のお腹の下から時折這い出して来ては近くの茂みを探検し、再びその温かそうな母親のお腹の下に戻っていく雉の雛達 ―「マガモの行進」の愛おしい光景とはまた違い、それはそれで母親の偉大な愛を受けて与えられた命を謳歌する雛達の嬉しそうな様子を伝える感動的なひとこまでした。

孵化した翌日、新しい世界への巣立ちが始まりました。草原の中の巣と違い、職員室の入口横の花壇の中に作られた巣は、キツネ、アナグマ、イタチ等の外敵からは安全だったものの、まず乗り越えなければならないのは、花壇から一・五メートル下の階段への大ジャンプです。流石に母鳥はその危険を察知し、何と落下地点で自分をクッションにして待っています。決心がつかずに鳴き声をあげるヒナ、下から懸命に呼ぶ母鳥、何とも微笑ましい光景でした。

母鳥の背中に上手く着地できたもの、失敗したもの、数えてみると何と十七羽もの雛が孵りました。全員が大ジャンプには成功したものの、これで終わりではありません。落下地点で母鳥の温かい羽の中で三十分ほど休憩した後、次の挑戦は、五段の階段を下りることです。一段一段母鳥の声に励まされて階段を下りていきますが、なかなか降りられない雛に生徒達から「頑張れ！」の声援が掛かります。二段降りた所でまたもや母鳥の羽の中で休憩。ここで大異変です。何とここで力尽きたのか、次々に雛達が倒れていきます。五羽の雛がぐったりと倒れ力尽きてしまいました。母鳥とともに十二羽の雛達が森の中に帰っていきました。自然の持つすばらしさと残酷さを同時に感じ、十二羽の無事な成長を願わずにはいられません。

雉の雛が階段を下りようとしている瞬間

ケンブリッジ大学サイエンスワークショップ２０１１

７月にケンブリッジ大学で行なわれるサイエンスワークショップに、東日本大震災被災地域から５校の高等学校の生徒と先生方を招待することになりました。地震の事後処理、原子力発電所での懸命の復旧作業、被災地域での不安な生活の様子などが今なお報道され続けていますが、困難な生活の中でも次世代を担う高校生に少しでも将来への夢と希望を持ってもらおうと、主催団体であるクリフトン科学トラストと共催団体である立教英国学院が合同で企画したプロジェクトです。

ワークショップ前には立教英国学院に宿泊し、ロンドン研修が企画されています。世界で最も古い科学学術会議である王立協会や、ろうそくの科学などをテーマに市民との科学的対話(クリスマスレクチャー)で有名な王立研究所、江戸時代末期に初めて長州・薩摩藩からの留学生を迎え入れ、日本近代国家建設への先駆けを育てたロンドン大学ユニバーシティカレッジへの訪問を予定しています。

ケンブリッジでのサイエンスワークショップは、7 月 24 日から始まります。ケンブリッジ大学で研究する最先端科学者の指導により、日英の高校生が協力して、物理、化学、動物生態学、植物生理学、地震、放射能、天文学、生命医学といった幅広い分野で、実験や調査、討論を行い、科学を通した国際交流を目指します。

メールマガジンご希望の方は下記ホームページの「メールマガジン配信登録」から登録ができます。

www.rikkyo.co.uk

立教英国学院通信を電子配信に切り替えたい方は下記までご連絡下さい。
ご意見、ご感想もこちらへどうぞ。
infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk

編集後記

今年度より本校は日本から生徒の受け入れを始めました。特に中１と高１では英語への強い学習意欲を持つ生徒たちが数多く入学し、新鮮な空気に包まれると共に、ハーフタームは 70 名以上もの生徒がホームステイを体験しました。ウォルバーハンプトン校との短期留学には新入生を含む中３から高２まで７名の女生徒が参加しています。

さらに JAPANESE EVENING やアウティング、小中学生のフィールドワークなど英語に触れる機会が数多く設けられ、生徒たちは積極的に英語を話そうと奮闘しました。来学期は TOEIC 受験も開始します。今年もまた、立教英国学院は新たな取り組みに力を注いでゆこうと思います。